

八千代市の自然と里山

八千代市環境保全課 高倉 歩

八千代市の自然と里山の紹介ということで、簡単にご紹介させていただきます。



八千代市は千葉県北西部に位置し、都心から30kmの所にあります。面積は51km²で、東西8km南北10kmほどの地形をしています。これは「八千代市の自然を歩こう」という資料にも記載されていますが、下総台地上にあり台地に谷津がいくつも深く入り込んだ複雑な地形をしています。

地形は台地と谷津の低地からなります。台地の最も高いところで標高は30m、谷津の最も低いところでは2m程であるため湿地と谷津田が広がっています。

この湿地は、縄文時代には霞ヶ浦にまで広がる大き



な湾の最も奥にあり、海につながっていました。そのため、現在でも東京湾に近い場所にありながら、降った雨は印旛沼から利根川を通り太平洋へと流れています。台地の淵のいたるところに、縄文時代の人々が暮らした痕跡が残っています。平坦でありながら複雑な

地形は、地球が氷河期や温暖化の時期を繰り返したことによりつくられたものです。このため、市内ではモミの木やカタクリなどの北方系の植物がある一方、温暖帯性の樹木も見られます。また、湿地の谷津田から台地上の畑まで多様な環境があるため、生物多様性に富んでいます。

水辺のある風景



八千代市では、平成12年から3年間かけて水辺を中心とした自然環境調査を行ったところ、魚類ではホトケドジョウやメダカ、両生類ではニホンアカガエル、鳥類ではコアジサシやチュウサギ、哺乳類ではニホンリス、昆虫ではヘイケボタルやミヤマセセリ、植物ではリュウノヒゲモやイチリンソウなど、多くの絶滅危惧種に指定されている動植物が存在していることが確認されています。

次に八千代市の里山の状況についてですが、人々は過去から農業を中心として暮らしを営んできました。したがって市内全域が里山といえる状況でした。昭和30年代当初は、人口が3万人程でしたが、日本で初めての住宅団地が、市の南部にあたる八千代台につくられたのをきっかけに、大規模な団地の造成が相次ぎ、当時、人口の増加率は全国一を記録しました。また、工業団地等も形成されました。平成8年には、市の中部を東西に東葉高速鉄道が開通し、再び宅地開発が盛んになり人口が急増し、現在18万5千人となっています。このような状況のため、現在の里山の環境は市の中部から北部にかけて、また南部の一部に残っているといえます。

ようこそほたるの里へ！



草刈り作業



最後に、本市の施策についてです。市では生物多様性に富んだ市自然環境を保全しようと、平成4年からほたるをシンボルに「ほたるの里づくり事業」を始めました。

これは市内米本地区にほたるの自生地をつくるとともに、住民、企業、行政が互いにパートナーシップをとりながら、ほたるの里を管理運営していくものです。里山の環境に関わる市民団体の方々も年々増えてきています。

河川の浄化に取り組む団体、環境調査を行う団体、山野草の保全に取り組む団体、ゴミの減量をすすめる団体、草刈りや清掃活動を行う団体、自然観察を行う団体、里山を体験する団体、環境整備を行う団体等、様々です。里山に関する関心は高まっています。昨年策定した、第3次総合計画後期基本計画の中では、里山保全事業を先導的の事業として位置づけ、新たな取り組みを始めています。以上で、環境保全課からの紹介は終わります。

八千代市の地形と地質

飯綱神社の境内から新川の宮内橋を見下した写真です。神社の建つ場所は新川の両側に広がる水田よりも一段高く、向こうに見える家並みの後ろも急斜面となっており一段高くなっています。このような「段」のある地形が、八千代市の地形の特徴です。この時、水田のある低い面を「低地」、飯綱神社のある高い地形面を「台地」と呼び、どちらも平らです。八千代市周辺の地形は、高さの異なる二枚の地形面とその境界の急斜面（段丘層）からできているのです。

上の写真は村上の工事現場で撮影しました。木下層の中に見られる貝化石と巣穴の化石です。貝の大部分はバカガイ、1個だけある丸いのはハスノハカシパンというウコの仲間です。しかし巣穴の主がどんな生物だったのかはわかりません。

沖積層の主体をなすのは青緑色の粘土層です。この中には海に棲む、ケイソウというプランクトンの化石が含まれていて、この地層が海に積もった地層であることがわかります。この海は現在の利根川下流域から印旛沼を経て、新川低地まで入り込んでいた海で、「古鬼怒湾」と呼ばれています。新川低地の上流部にはこの粘土層は分布せず、かわりに黒色の材化石の破片をたくさん含む、湿地堆積の泥炭層が分布します。この泥炭層の分布域の境界は新川低地では宮内橋付近にあり、古鬼怒湾の海岸線がこの付近にあったことを示しています。

地層は下から順に積もります。また谷のようなものが地層を切るときは、切った谷の方が切られた地層よりも後からできたものです。ですから台地と低地を作る地層は、上岩橋層→木下層→常総粘土層→武蔵野ローム層→立川ローム層→沖積層の順序で積もったことになり、立川ローム層と沖積層の間に新川低地のもととなった谷が作られています。新川低地のできかたを簡単に示すと下の図のようになります。

1. 古東京湾の時代 2. 湿地の時代 3.V字谷の時代(1) 4.V字谷の時代(2) 5. 古鬼怒湾の時代 6. 現在

「八千代市湧き水マップ」より 発行元「八千代自然と環境を考える会」